

令和7年度静岡県立美術館協議会 議事録

令和7年7月17日(木)14:00～16:00

静岡県立美術館講座室

【稲葉企画総務課長】

鈴木委員は30分ほど遅れるという連絡をいただいております。それ以外の方、皆さんお揃いですので、少々早いですけれども始めさせていただきます。

ただいまから令和7年度静岡県立美術館協議会を開催いたします。本日司会進行を務めます企画総務課長の稲葉と申します。どうぞよろしくお願いいたします。お手元に配布してあります次第によりまして議事を進めてまいります。なお、協議会の内容につきましては、議事録にまとめ、「情報提供の推進に関する要綱」に基づき一般公開されることをご理解ください。

本日の委員及び美術館職員の出席につきましては、お手元の静岡県立美術館協議会出席者一覧のとおりでございます。初めに委員の交替につきましてご紹介いたします。お手元の静岡県立美術館協議会委員名簿をご覧ください。学校教育区分といたしまして、昨年度入口強志委員でしたが、その委員の後任に石井康義委員の就任をお願いいたしました。同じく学識経験区分として、石川善太郎委員の後任に、上原広彦委員の就任をお願いしております。また望月宏明委員の後任に神戸重敏委員の就任をお願いいたしました。

それでは委員の皆様、簡単に自己紹介をお願いしたいと思います。名簿の順番でお願いしたいと思います。まず最初に鬼頭委員お願いいたします。

【鬼頭委員】

鬼頭でございます。現在、静岡県文化協会の会長を務めております。元静岡県立大学の学長を務めておりました。それ以来、静岡に浸っております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

【稲葉企画総務課長】

続きまして、上原委員、お願いいたします。

【上原委員】

静岡新聞社の上原と申します。長いこと、新聞記者をやっております。主に政治、社会事件の取材を続けてまいりました。6月24日付けで編集局長に就任いたしまして、石川の後任として、今日から加えていただくこととなりました。どうぞよろしくお願いいたします。

【稲葉企画総務課長】

加藤委員、お願いいたします。

【加藤委員】

加藤と申します。現在、アーツカウンシルしずおかのアーツカウンシル長を仰せつかっております。元々は30年位、企業の文化活動を担当してまいりました。その頃、木下館長には、大変ご指導いただきました。そうしたことで、静岡にも縁ができました。東京オリンピックの時に文化プログラムというものを作って、そこのディレクターをやらせていただいたので、そのまま引き続きアーツカウンシルを

設立するという時に、お手伝いさせていただくということになって、アーツカウンシルもこれで5年目でございます。

その後、鈴木知事に初めてプレゼンをする機会を得て、私は全国のアーツカウンシルづくりに7～8か所のお手伝いをしてきましたが、あんなに褒めていただいたのは初めてでした。「非常に素晴らしい活動なので、継続するように」と激励を受けました。美術館の専門ではありませんが、どうぞよろしく願ひいたします。

【稲葉企画総務課長】

続きまして、曾根委員願ひいたします。

【曾根委員】

県立美術館友の会の会長をしております曾根正弘でございます。もう6～7年になりますけれども、継続してやらせていただいております。元々はテレビ局で、地元のテレビ局の経営もやっておりましたが、近年は音楽関係の団体のまとめ役をやったり、色々な団体に関係してございまして、キリがない位色々となっておりますけれど、要するに地元のあらゆること、特に文化関係に関して会議等に出席しております。できるだけ、静岡の文化を盛り上げて行こうと思っております。美術と音楽が私の両輪ですが、私のキャパシティの範囲でやらせていただいております。よろしく願ひいたします。

【稲葉企画総務課長】

続きまして、富沢壽勇委員よろしく願ひいたします。

【富沢壽勇委員】

静岡県立大学の副学長を務めております富沢と申します。大学では国際交流担当です。

最近、県の財政緊縮の状況により、大学の方でも厳しい状況となっております。美術館も多分、同様な傾向があるのではと思っており、そうした視点も含めて今日はお話しできればと思っております。

私は専門が文化人類学で、国立民族学博物館等とも色々関わりがありまして、最近は美術作品と生活文化の中の様々な人工物等との関係にも関心を持っております。よろしく願ひいたします。

【稲葉企画総務課長】

続きまして、富澤かな委員願ひいたします。

【富澤かな委員】

東京大学の富澤と申します。昨年は日付けが合わず欠席してしまいました。久しぶりにお邪魔いたします。一昨年までは静岡県立大学にいまして、その間にご縁をいただきまして、こちらに2回お邪魔しております。

やはり静岡県立大学にいる時に、隣に美術館がある豊さというのは、すごく満喫することができました、その割に学生がもっと来ればいいのに、「みんな、もっと行こうね」と言っても案外来なかったりと、そのように思っておりました。

私自身は宗教学、近代インドに関する宗教学が専門で、決して美術に明るいわけではないのですが、私はお墓が好きで、インドに残っているイギリス人の墓がなくなっていくものですが、文化の記憶を伴うものがどういう形で残って継承され、人々に見られたり語られたりしていくのか、ということに関心

を持っております。

美術館は特別な場所だと思っておりますので、このような形で関わる事ができてありがたく思っております。これからもよろしくお願いいたします。

【稲葉企画総務課長】

続きまして、日比野委員お願いいたします。

【日比野委員】

日比野秀男と申します。よろしくお願いいたします。現在、掛川市のステンドグラス美術館と二の丸美術館の館長をしております、11年目になります。11年続いているのは、なんとかつぶれないで、横ばいか何かで置かせていただいていると思います。

その前は常葉大学の教員を25年勤めまして、その前は県立美術館の学芸員として4年いました。平成2年3月に退職、昭和61年4月にここが開館したものですから4年間、開館後いまして、その前、準備室に6年間勤めました。何もないところから、美術館を創ることになったわけですけど、作品収集から建物について、ずいぶん勉強させていただいたことを覚えております。自分のこと以外はできないかもしれませんが、また色々勉強させていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

【稲葉企画総務課長】

続きまして、堀切委員お願いします。

【堀切委員】

常葉大学の堀切正人と申します。大学の教員をしておりますけれど、学校教育の場でも少子化の影響がヒタヒタと迫ってきております。常葉は系列の幼稚園から大学までありますが、子供の数が減っておりますので、定員を確保するのに苦労しております。

こういう状況を鑑みますと、文化の力というのは若者を惹きつける、県外に出て行ってしまう若者を何とか県内にとどめたいと思っているわけですけど、そのためにも文化の力というのは必須であると思っています。何とか頑張って若者にいてもらえるようにしたいなと思っています。

【稲葉企画総務課長】

最後に神戸委員お願いします。

【神戸委員】

この6月から県観光協会の専務理事を務めさせていただいております神戸と申します。私、県の職員をしております、3年前まで県立大学の事務局長しております、鬼頭学長はじめ、富沢先生に大変お世話になりました。

今回、こちらに仲間入りさせていただいて、私の使命は美術館に多くの方に足を運んでいただく、とりわけ、観光客、インバウンドはじめ、そういう方に足を運んでいくような仕組みづくりに協力させていただくというふうに思います。私ども観光協会には、旅行会社から出向してきている者もおりますので、そういう力を使いながら仕組みづくりに協力してまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【稲葉企画総務課長】

ありがとうございました。遅れております鈴木委員におかれましては、到着次第ということで、よろしくをお願いしたいと思います。

また石井委員、松永委員、本郷委員におかれましては、所用によりご欠席という連絡を受けておりますので、ご報告させていただきます。

それでは開会に先立ちまして、館長の木下からご挨拶を申し上げます。よろしくお願いいたします。

【木下館長】

皆さんこんにちは、館長の木下でございます。大雨が危惧された中、お忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。新しい委員の方をお迎えしておりますので、毎回同じことを申し上げるのですが、この美術館協議会とは何であるかということを一言ご案内いたします。

当館は1986年に開館しました。来年には40周年を迎えるわけですが、協議会は開館と同時に設置されております。というのは、美術館は博物館法に基づいて運営しております。その博物館法第23条に「公立博物館に、博物館協議会を置くことができる」とあります。これを受けた当館の「静岡県立美術館協議会設置要綱」第1条に協議会の目的が明記されておまして、これを読み上げます。「静岡県立美術館の運営を円滑に進めるため、美術館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、館長に対して意見を述べる機関として、静岡県立美術館協議会を設置する」。したがって、今日いただくご意見は全て、私のところに向けて発していただきたいと考えております。

美術館はこの協議会とは別に、あと少なくとも2つ外部の委員をお迎えして、当館の活動をチェックする機関を持っております。

1つは、専門委員です。これも発足は古くて、むしろ、開館以前にまで遡ります。日比野委員が、開館のさらに6年前からここで働いていらしたとおっしゃいましたけれど、6年前と言えば1980年であり、それは当館にとって画期の年でした。この年に、建設委員会が建設計画に関する答申を教育長に出しています。すべてはこの答申から動き出したと言ってよいかもしれません。そこで、資料選定委員、資料評価委員、さらに顧問が設けられました。これを開館時に専門委員という形で仕切り直しましたので、本協議会と専門委員は開館の時から続いているわけです。

その後、美術館が活動を展開するうちに、もう1つ必要だろうということで生まれたのが第三者評価委員会です。これは2006年、今から20年ほど前に正式にスタートしました。この第三者委員会は、前二者の委員会とは性格を異にしております。その目的は、設置要綱が年報に載っていますが、第1条で、美術館の自己評価及び県庁の支援体制等を第三者の視点から評価すると明記されております。つまり、美術館が、自分たちの活動を評価する、それに対して、外部から評価していただくということが1つ。それから、もう1つ、これが非常に重要なのですが、県庁の支援体制を評価するというところで、主催者は美術館ではなく、スポーツ・文化観光部、あるいは文化政策課になりますか、いずれにしても主催者は美術館でなくて、もう少し大きな視点で、静岡県の文化行政の一出先機関としての美術館活動を共有するという仕組みです。これら3つの委員会によって、当館の活動にご意見を賜り、それを改善に繋げていくということで動いております、と言うことで、少々長くなってしまいましたが、40年前に当館は博物館法に基づいてスタートをきったわけです。博物館法は社会教育法の下にありますので、開館時点では、当館は明白に社会教育施設でした。社会教育施設として、他方に学校教育を想定しながら活動を続けてきたのだと思います。ところが近年、美術館を取り巻く環境は本当に大きく変わりました。私が館長に着任してまる8年になりますが、この8年間の変わりようは本当に大きいですね。先ほど観光の話が出ましたが、今、とても重要なキーワードとして、「文化観光」があります。美術館はもはや

博物館法にだけに基づいているわけではなくて、様々な動きの中で新しい役割が期待されている。言い換えますと、美術館はこれまでどおりのことをやるのではなくて、変わっていかなければいけない。そのためには、来年に迎える40周年は非常に良い機会だろうと思っております。ただ今、かなりしつこく、この美術館がなぜこのような形になったのかということを調べております。日比野委員はまさに生き字引、これからインタビューに伺い、いろいろご教示いただきたいなと思っております。

40周年を節目に、これからの美術館を考えたいという、そういう時期です。本協議会では、昨年度の活動をお示ししてご意見をいただきますけれども、これまでだけではなく、これからの美術館はどうあるべきかについてもぜひ語っていただきたいと思います。

40年というとても重要な節目を迎えるということは、言い換えると、40年後はどうなっているのだろうと考えることでもあると思っております。40年後は2066年、その時私が生きていたら何歳だろうと思って計算してみました。112歳です。生きてはいないと思いますが、それ位先を見とおしながら、美術館のこれからを考えていかなければいけないと思いますので、今日はそういうことも含めて、ぜひ忌憚のないご意見を賜りたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

【稲葉企画総務課長】

今、鈴木委員がお見えになりましたので、簡単に自己紹介をお願いします。

【鈴木委員】

遅れて申し訳ありません。鈴木雅道と申します。県立浜松江之島高校の校長をやっております。昨年度までは横須賀高校の校長をしておりまして、委員として3年目となります。よろしくお願いいたします。

【稲葉企画総務課長】

どうも、ありがとうございます。

次に美術館の協議会設置要綱第3条の規定によりまして、協議会に会長及び副会長を置くことになっております。本日は新たな任期となつての初めての会議になりますので、議事に先立ちまして、会長、副会長の選出をお願いしたいと思います。同要綱第3条第2項の規定によりまして、委員の互選により定めるとなっておりますが、ご意見ございますでしょうか？

【神戸委員】

現在、県文化協会会長を務めておられ、県立大学の学長も務められました鬼頭委員が会長に最適だと私は思います。

また、静岡県の美術に非常に詳しくていらっしゃいます常葉大学教授の堀切委員が副会長に適任かと、このように存じます。いかがでしょうか？

【稲葉企画総務課長】

ありがとうございます。

ただ今、神戸委員から、会長を鬼頭宏委員、副会長に堀切正人委員にというご意見がありましたが、いかがでしょうか？

（異議なしと聞いて）

ありがとうございます、それでは、会長を鬼頭宏委員、副会長を堀切正人委員にお願いしたいと思い

ます。恐れ入りますが、席のご移動をお願いできますでしょうか？

（席移動）

ただ今から議事に移ります。

これからの議事進行は、美術館協議会設置要綱第3条第3項の規定により会長である鬼頭委員に議長をお願いいたします。鬼頭会長、よろしくお願いいたします。

【鬼頭会長】

ただ今、推薦されましたように会長となりました鬼頭でございます。日比野前会長の後を受け継いで、40年先の美術館を見通して色々提案していければと思います。

それでは、早速ですが議事に入ります。お手元の配布資料をご参照いただければと思います。議事に従いまして、（１）及び（２）について事務局より説明していただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

【滝副館長】

この4月からと副館長となりました滝正晴と申します、よろしくお願いいたします。3月までは3年間富士宮の富士山世界産センターで同じく副館長ということでやっておりました。よろしくお願いいたします。では、説明の方は座らせていただきます。

お渡ししてあります、資料1から資料3、まとめて説明させていただきます。

まず、1ページ、令和6年度事業実績ですけれども、1の収集についてです。購入につきましては、真ん中あたりになりますけれども、令和6年度の取得状況ということで、狩野探信守政の日本画及び小山田二郎の油彩画が各1点の計2点、それから、それから寄贈につきましては、閉館いたしましたヴァン・ジ・彫刻庭園美術館からの61点を含みます101点ということで、令和6年度末での資料の保有状況は2,948点となっております。

次に、下段の保存についてです。年間を通して、館内外の生物環境調査を行ってきております。また、昨年度はクラウドファンディングによる資金を活用しまして、めくっていただいて、2ページの上段にあります、2点の屋外彫刻作品につきまして修復等を行いました。

次に3の展示についてです。（2）の令和6年度展覧会開催実績にありますように、企画展につきましては4回開催をしております。1つ目の「テオ・ヤンセン」展は人工生命体「ストランド・ビースト」を中心とした展覧会で、実際にそれを動かす「リ・アニメーション」を実施する、それから展示室以外のエントランスホール等にも展示しました。

それから、3つ目の「無言館と、かつてありし信濃デッサン館」では、につきましては、ほぼ毎週末に著名なゲスト等を招きましてイベント等を実施して展覧会を盛り上げたところでございます。また令和6年度は、ロダン館の開館30周年にあたりましたので、記念する展覧会も開催をいたしました。展覧会の観覧者数ですけれども、見込みと実績がかけ離れたものもありますけれども、企画展及び収蔵品展の目標122,250人に対して104,345人となり、令和2年度以来、久々に100,000人を超えることとなりました。なお展覧会の観覧者数の内訳、それから年度別の観覧者数につきましては8ページ、9ページの資料2の方に記載がございますので、後ほどご覧ください。

次に3ページをご覧ください。4の教育普及についてです。教育普及のプログラムにつきましては28本のプログラムに見込みが11,985人のところを17,822人と大変多くの方にご参加いただきました。

企画展にちなんだイベントとして、「テオ・ヤンセン」展における観客自らが動かせるものの野外イベントであるとか、「石崎光瑠」展では見えない人と見える人のためのおしゃべり鑑賞会、それからロ

ダン館開館30周年にあたっては、ロダン館でのヨガ体験といった新たな試みを実施したところです。

次に5番の調査研究についてです。毎月1回程度のペースで学芸課職員による研究会の実施を引き続き行いました。研究紀要の発行を通じて、コレクションや展覧会に関連する調査研究も進めてまいりました。

1ページめくっていただいて、4ページ中段の6広報をご覧ください。(2) ア 情報発信機能の強化ということで、ホームページやSNS、マスコミへの資料提供などを行い、特にSNSにおける情報発信を積極的に実施しました。Xでは年度当初、先ほどの「テオ・ヤンセン」展での作品が実際に歩行する姿の映像、それから年度末にはミュージアムショップのオリジナルグッズである「じゅかぞう」等が注目をされたところです。

また、5ページに記載してありますけれども、引き続き教育機関や地域等との連携も積極的に進めてまいりました。1ページめくっていただきまして、6ページの上段になりますが、広報の中でも新たな取り組みとしましては、インバウンド、特に欧米それから東アジア向けに美術館紹介動画、ショートバージョンとロングバージョン、30秒と1分30秒ですが、そういった美術館紹介動画を作りまして公開をいたしました。

それから、インバウンドの需要を取り込むということで、ランドオペレーター向けのファムトリップ、中国の教育旅行向けのファムトリップ等受け入れをして、旅行商品の素材としての魅力をPRしていきました。また、県の方で結んでおります包括連携協定がございまして、こちらを活用しましてイオンモール等へ広報ブースを出展いたしまして、美術館の紹介に努めたところでございます。

次に真ん中のところです。7環境施設整備ということで、令和6年度の建物そのものにつきましては、ロダン館非常用発電設備の更新、本館講堂の舞台音響設備、照明設備の更新等の施設設備を行いました。それから、レストランにおきましては、企画展ごとに県産品を使用した特別メニューを用意していただきまして、そちらの提供をいたしました。また、ミュージアムショップ、こちらの方は昨年、6年度の7月に運営者が変わりまして、新たにオリジナルグッズの開発販売をお願いいたしました。

そして、下段の8運営についてです。(2) 実績ア運営基盤の拡充、収入の確保ですけれども、最初にも説明しましたけれども、「次世代へつなぐ!アートとみどりの散歩道 再生プロジェクト」クラウドファンディングと言うものを実施しまして、目標額が1,000万円のところを1,060万9千円のご寄付をいただきまして、先ほど申し上げましたように2点の彫刻、アマリリスとちかんざしの修復、それから、作品周辺の植栽の伐採等を行うことができました。

また、「無言館と、かつてありし信濃デッサン館」展におきましては、協賛企業4社から寄付金をいただき、コンサート、講演会、コーポレーションデーといったものを開催できました。

それから、最後7ページのところですけれども、企業との連携強化による運営の充実ということで、株式会社三井住友信託銀行静岡支店さんと遺贈に関する協定を結びました。以上が、令和6年度の事業実績となります。

続きまして、資料3、通しのナンバーになっておりますので10ページをお開きください。令和7年度事業計画及び実施状況についてです。

まず1の収集につきまして、今年度も少額ですけれども購入予算の方が付いております。現在、購入作品の検討を行っているところでございます。また、寄贈につきましても、申し出もありますので、現在、寄贈者の方との調整や作品調査を行っているところでございます。

次に2の保存についてです。例年同様、館内外の生物環境調査や防虫作業を実施して作品の保全に適した環境を維持してまいります。

次に3の展示についてです。1ページめくっていただきますと、今年度の展覧会の一覧表がございます。多様な内容の展覧会を開催する計画となっております。一番最初の「ブルックリン博物館所蔵特別展古代エジプト」につきましては、既に終了しておりますが、見込みの61,000人に対して実績として、66,000人を超える多くの方がご来館されました。現在は、この後、お時間のある方にはご覧いただきたいのですが、自主企画「これからの風景」を開催中であります。秋には「金曜ロードショーとジブリ」展、年末には静岡県出身の現代作家、「中村宏」展を開催いたします。

次に11ページの下段になります。4の教育普及についてです。今年度は29本のプログラムを予定しております。引き続き企画展と関連した館長講座や実技のワークショップを開催してまいります。

12ページをご覧ください。5の研究研究についてです。学芸課の研究会や研究紀要を計画的に引き続き実施をしてまいります。新規の事業としましては、最後、オとして館蔵品のデジタルコンテンツ化とありますけれども、伊藤若沖「樹花鳥獸図屏風」の三次元計測を行ないまして、作品をより詳細に分析するということで、そのデータを使いまして、さらに3Dデジタルコンテンツを作成してWeb上での公開や、アニメーション化等を計画しているところです。

次に6の広報についてです。12ページの下段をご覧ください。アの情報発信機能の強化ということで、令和6年度に引き続き様々な方法手段を活用して情報発信に努めていきます。その中でも新たな取り組みとしては、1ページめくっていただいて、13ページ、こちらの(サ)にありますように、美術に詳しいバーチャルユーチューバー、Vチューバーですね、を活用したロダン館のナイトミュージアムの開催や、その方によるロダン館に限らず音声ガイドの作成等を現在計画しているところです。また、(シ)ロダンウィークですけれども、例年11月に実施しておりますが、今年はジブリ展の関係もありまして、9月に実施することになりました。この中でも、やはりロダン館に人に来ていただきたいということで、こちらでも、スタチューパフォーマー、よく大道芸等で銅像のような格好をして、動かないで、何かの時に動き出すようなパフォーマーの方がいますけれども、その方々を何人か呼んで、最終的にロダン館に人を集めるということを現在計画しております。

続いて14ページになりますけれども、中段をご覧ください。7の環境・施設整備についてです。観覧者の利便性の向上のために10月中旬から新年まで開催する「金曜ロードショーとジブリ」展におきましては、土曜日を中心に開催期間中、18日間、20時までの夜間開館を実施いたします。また、6年度のところでも報告しましたが、ミュージアムショップが昨年度から新しくなりまして、新たにオリジナルグッズを開発販売いたしました。今年度も引き続きオリジナルグッズの開発をお願いしていきます。

最後に8の運営についてです。(2)ア運営基盤の拡充のところで、めくっていただいて、最後のページ、15ページになりますけれども、従来からの企画の観覧料は、その企画展の都度を定めておりましたが、1,500円という上限が定まっておりました。昨年度末にこの条例を改正いたしまして、この上限1,500円を撤廃いたしましたので、開催経費が大きな展覧会においても経費に応じた観覧料を設定できることになり、収入の確保を図ることができるようになりました。今秋開催の「金曜ロードショーとジブリ」展では、今までの1,500円という上限を超える、一般の方の金額としては、1,900円という金額の設定となっております。また、最初の館長のお話にもありましたけれども、来年度、開館40周年を迎えるということになりますので、40周年における年間のサポーター、1つの展覧会ということではなく、年間のサポーターになっていただける企業にお声掛けを開始したところでございます。説明は以上です。よろしくお願いいたします。

【鬼頭会長】

どうもありがとうございます。ただいま、滝副館長より、令和6年度の事業実績、観覧者数の推移、令和7年度の事業計画についてご報告いただきました。それらの内容につきまして、ご意見、あるいはご質問ありましたら、ご自由に発言していただきたいと思います。

【日比野委員】

お聞きしていて1つ思い出したことがあるのですが、39年前にこの美術館が開館した時に入館者をどの位に目指すかと、開館記念展というものに対して1億円で、清水、静岡の当時の人口が約80万人ですので、8万人位欲しいと、それは前後して三重県立美術館と岐阜県美術館が開館して、その地域の人口の1割位は入館して欲しいと、それで結果的にはお陰様で12万人位入ったと思います。

当時、ブックショップという売店がすごく売り上げが大きくて、だいぶ儲かりました。それで美術館が色々と買いたいものがあつたので、逆に売店が寄附してくれました。

今、39年なり、40年たって、岐阜県美術館、三重県立美術館、そういうところと静岡県立美術館がどういう位置にいるのかということですね、僕が思うには、美術館というのは色々な要素があつて館の力というものがありまして、地盤、その地域の人口、収蔵品とか、できてきた経過というものがある、美術館の潜在的な力というものがあります。それで先ほど開館記念展が12万人と申し上げましたけど、三重と岐阜がその地域の人口の1割位入っているから、静岡も8万人位入れなくてはいけないということで、それで1億円の展覧会をしたわけですけど、それで1.5倍位の入館者になったわけです。人数だけで全ては言い切れないにしても、静岡県立美術館が持っている力は何の位の位置にあるのかなということを考えていただくことも40周年を迎えるにあたって必要なことと感じたものですから申し上げました。

【木下館長】

その視点はあまり持っていないように思います。少なくとも、私は三重と岐阜と比べるという観点は持っていなかった。

【日比野委員】

三重と岐阜が少し早く開館しました。館の前に記念碑的な彫刻がありまして、静岡県でも何を置こうかということになって、具象では同じようなものになってしまうから、アメリカの抽象彫刻にしようということでアマリスというものになったと思うんですけど、やはり、ある程度の経緯を見ていながら、他の所の経緯もあるでしょうし、ここが、どういう風な所にいるのかを振り返っていただくのもいいかなと思います。

【鬼頭会長】

美術館の活動評価については、1つの目安としては入館者数で、最初からそれを想定して規模を考えようとなりますね。

【日比野委員】

静岡県がどの位の全国位置にあるのかということで、お金が大体決まってくる。それ以上にいくのも大変だし、それ以下にいくのも難しいし、そういうのを横睨みしながら、自分たちの評価というものを創っていけば良いと思います。

【鬼頭会長】

そうしますと、一番新しいデータとしては10万人を超える観覧者ですが、どうですか？ 日比野委員から見て成功しているとお思いですか？

【日比野委員】

この静岡県立美術館のことですか？開館当時の8万人を目指したのは、静岡と清水の人口が80万人で、その1割で8万人という数字を出しました。それは、先ほど言いました三重県立美術館と岐阜県美術館が、その地域の1割位、ただ、三重の場合は津市の人口が少ないものですから、そういう意味では少し低めに見ないといけないと思いますが、なんとなく1割という数字が出てきています。ここに、年間の入館者の数字がありますけれど、多い、少ないは見方が色々ですが、自分たちがどの位の位置にあるのが正しいというか、目指さなければいけない、そういうのはあるのではないかと思います。

それと、金額のかけ方がいくらなのか、5億円か3億円か存じ上げませんが、私、今、掛川へ行ってまして、大体2つの小さい美術館で1億円位なんですけど、2つ足して入館者数が5万人位、5万人に対して1億円、そうすると静岡県立美術館は10万人なので、2倍の数字で、2億円で賄っているのか、内容が違うから3億円かかっているのか、色々なことがあるとは思いますが、絶対的な数字ではなくて色々なことを考えて、私たちにはどういう責任があるのか、どういう義務があるのかということを考える必要があるのでは、と思います。

もう1言だけ申し上げてすみませんが、掛川市は人口が11万人位で、小中生が1万人弱、9学年で1,000人前後です。1,000人とすれば9,000人になります。1,100人位の時もあれば900人位の時もあるし、大体9,000人位、僕は美術館2つで小中生が年間で9,000人入れたいなと思ったんです。静岡ですと80万人ですから、8万人か6万人入れなければならない、掛川ですと、1/6ですから、9,000人位入れば、9学年で1回1人来たことになるということで随分頑張ったんですけど、まあまあいいかなという感じがしています。博物館の方は入りやすいです、美術館はちょっと難しい、県立美術館は多く入っていると思いますし、なんかそういうように、全部に網を打つのではなくて、焦点を絞っていくと成果が上がりますよなと思います。

【鬼頭会長】

ありがとうございます。1つの指標になると思います。県立レベルで見ると、どのレベルで見ると、色々あると思いますが、研究テーマかなと思います。

【富沢壽勇委員】

数値目標は重要だと思いますが、もう一つ中身のところで、今日の事業報告とか計画を拝見してみますと、県民のための社会教育施設だと館長がおっしゃったとおり、県民の入館というものを一番中心に置かれていると思いますが、他方、静岡県立美術館に来ないと見られない物に惹かれて県外の方たちが集まってくるような美術館ということも、もう一つの魅力ではないのかなと思っています。

収集について、この館の基準で、県に関係のある作家のもの、富士山関連の物等、幾つかあると思いますが、そういうような形で収集を重ねていきながら、関心を持っている方が「一度は来ないとな。」という美術館を40周年に向けて考えていけば良いのかなと思います。

来館者の質の問題について、世代的にもどの辺までカバーするのかという問題もあって、昨年度の実績でいうと、「テオ・ヤンセン」展はかなり入館者を集め、広報を活発にやったので、その中で、幼稚園児や小中高生等、幅広い世代から集めることができました。

どのような世代に焦点をあてるかということですが、企画によっても変わってくると思います。

【鬼頭会長】

今の富沢委員の観覧者の総数だけではなくて、年齢構成、県外だと、どこから来ているのだとか、そのような情報も必要になってくると思います。そういう統計はございますか？

【滝副館長】

来館者の、そういったところまで統計は取れていないです。

【木下館長】

もちろん、展覧会によって違うわけですが、本当に遠くから県外から来ていただける展覧会もございました。

静岡県とゆかりは無いのですが、若冲を発見したということで昨年度の最後に開催した「石崎光瑤」展では、私の知り合いが1泊2日のツアーで東京から来たと、後から知らされました。日本平に泊まり、「石崎光瑤」展を見て、美味しい物を食べて、大満足だったようです。東京から新幹線ひかり号ならば、静岡までたったの1時間ですので、県外からの来館者を今後は十分に開拓する余地があるかと思っています。

それから、無言館展でも、そもそも無言館は信州上田にあるわけですから、そこへ見に行けばいいじゃないかと言われることもあったのですが、あの展覧会は信濃デッサン館と無言館という2つの美術館を一緒にここで見るという趣旨です。鹿児島から見て来てくださった2人連れがいたことをたまたま知りました。もちろん総数としては少なくとも、展覧会によって、県外からもいらしてくださる。もはや、県民のためだけに美術館がある時代では無いかなと思います。

【鬼頭会長】

他に何か…、どうぞ

【加藤委員】

昨年 of 企画の中で、「石崎光瑤」は非常に良かった。我々にとっては発見だったので、非常にありがたい展覧会でした。山岳会 of 関係もしておられたので、名簿が部分的ですけど写されていて、私がかつて関わった京都 of 大山崎山荘美術館 of 山荘自体を作った人も山岳会 of 名簿に出ている、そういう意味で縁を感じつつ、良い展覧会だなと思いました。

美術史の中で必ずしも光が当たっていなかった人たちを発掘してくるということが非常に重要です。それから、無言館 of 展覧会でも直接、静岡と関わりが無いように見えて、中にちゃんと静岡と、どういう関わりがあるのかという展示がきちんとされていて、そういう点も非常に素晴らしいなと思って、いつも大変勉強になり、ありがたいと感じています。

先ほどから話題となっている来館者の数という観点をこれからも維持していくという、これを指標に取るということが必ずしも時代に即応していないのではないかと気がしてしまっていて、というのは明らかに、まだ良いのですが、この先、子供たちを呼ぶと言っても、子供 of 数は激減することは明らかに見えているわけで、子供 of 数だけではなく全体的に言うと、世の中に人がいなくなるのに、人に来いと言っても、どれほど呼び掛けても、呼び掛けないよりは…、来館者というものを常にチェックしておくことは非常に重要だとは思いますが、これをいくら頑張っても、おそらく減ることは間違いないので、それを逆に追及されると、つまり、館は努力していないのではないかと、これまで10万人規模で来ていたの

に、8万人になり、7万人になり、あまり努力していないのではないかという責められ方をする危険性があるので、この指標はそろそろ参考データとして取り続けるし、なるべくなら増やしたい、その努力はすべきだと思います。

そこで我々が今、アーツカウンシルでやっている指標の取り方の1つの例なんですけど、全部美術館にあてはまるものではないので、これが直ちに特効薬といったわけではないですけど、私たちがやっているのは、当事者の数を増やすということです。アーツカウンシルで今、支援しているものはこうした専門家の展覧会を開催してそこを鑑賞していただく、県民に鑑賞をしていただくことによって、県民の文化度を上げるというやり方ではなく、県民自らがアートプロジェクトをおやりになるのを直接支援するという事は、一種の直接投資なので、その分、投資効果は上がるだろうと、美術館には申し訳ないけれど、あのような間接投資を頑張ってやるよりは、よほど直接県民の文化度を上げたいという最終目標に向かって行くのだったら、県民自らおやりになる活動に投資した方がよほど効果があるのではないかとということで、地域密着型のアートプロジェクトを年間30位支援してて、延べ数ですが、5年目に入りまして150位を超えて、それぞれの当事者がどれ位いらっしゃるか、運営側ですね、見に来られる方ではなくて当事者ですが、どれ位いらっしゃるかという、昨年度の実績で4,000人強いらっしゃる、5,000人弱として、あと5年頑張ってやると300位アートプロジェクトとを直接支援することになって、全体で4万人位の当事者を応援する恰好になるのだろうかという目標を立てていまして、4万人になるということは、人口の1%を少し超えるということですから、100人に1人が何らかの形でこういうことを経験されたということになると、後はほっといても、県民が自らドンドンプロジェクトを開発して、おやりになるだろうと、そういう状況をつくるのに、後5年位かけたいと思っています。

とは言え、県民がすぐにアートプロジェクトに取り組めるかというと、すぐ取り組める位なら、みんなアーティストになっているわけで、県民は原則、アーティストではないわけですから、そこで、専門の美術館なり、幅広い意味でのアーティストの役割が当然あって、アートプロジェクトと専門のアーティストを扱う美術館のような、ジャンルは違いますけど、グランシップとか、そういうものをひっくるめて、県が造っておられる文化施設でやっている文化活動ともう少し連携できないかと考えていまして、今も、既に美術館としてはボランティアの開拓とか地域の商店街と連携するとか、企業との連携とか、色々なことをやっておられて、それはそれで素晴らしいですけど、もう少し、県民のアートプロジェクトと連携をする、その時に美術館側の活動にアートプロジェクトが参加しろというのではなく、むしろ逆にアートプロジェクトの仕事を美術館がどうやったら参加できるかというような視点を持っていたと、そうした連携が生まれるのではないかと、そうすると、その人たちは普通に鑑賞される方々なので非常に必要なんですけど、それ以上に、美術館とコミットしていることになるので、つまり、1人1人の美術館に対する思い入れの深度が違う。その深度を計っていくということが、これから重要なことだと思うので、先ほど冒頭に館長が美術館の新しい役割とおっしゃったので、まさにその新しい役割として、そうした方向性も検討していただけるとありがたいと思います。

【木下館長】

美術館における当事者とは誰かという問題です。従来の考え方では、まずそれは鑑賞者です。美術館まで来ていただいて、こちらが用意した展覧会をご覧になり、それなりに感動を持って帰っていかれる。いわば美術館が発信者で鑑賞者が受信者ですね。今はそこにとどまらない。もっと参加性を高めていく方向です。まだまだ少ないですけど、以前に開催した「鴻池朋子」展では、参加性をかなり意識した展示となっていました。今後は、美術館に関与する人たちとは誰なのかを考えなければならない。美術館が一方通行に情報を提供するのではないということは、本当におっしゃるとおり、これから開発すべき

大きな課題だと思いました。

それから先ほど入館者数というのは、1つの指標に過ぎないということをおっしゃいましたが、私は、もう1つ重要な指標として、年4本開催する企画展の多様性がとても重要だと思っています。それをいかにバラエティーに富んだものとするか、それぞれの展覧会のメッセージが届く範囲は、それぞれに違うと思いますので、そこを上手く組み合わせる。さらに常設展示と連動させる。第7室は企画展に絡めるという形でやっています。

そもそも美術館が人間の多様な表現に触れる場でもあると考えた時に、展覧会は、たくさん人が入るものをやればいいという考え方はもう成り立たない。逆に、入らなくて構わないという考え方ももちろん成り立たない。やはり、多様な人々に向かって発信していくかが重要だろうと思います。

【富沢壽勇委員】

今、館長が示唆されたように作品と鑑賞者との相互作用、コミュニケーションの場としての美術館が重要だと思います。一般の博物館でも最近重視されています。

先週、「これからの風景」展を拝見しまして、その中で、触感を使う、音声を使うという五感を通じた鑑賞法を提供するというクリエイティブな展示方法に感心して、楽しませていただきました。例えば、その中でSPACの俳優さんの声を展示と一緒に使っておられていました。しかし、SPACなんだからムセイオンですね。事業報告、計画の中で、ムセイオンは地域連携の事業の一環とされ、ロダンウィークやそれに関連したスタンプラリーとか毎年同じものがでていますけど、これはこれで、多分好評を博しているのですが、実際に美術館の展示の部分でSPACの枠組みを使った新たなものを実際にやられているのですから、地域連携という限られた部分だけではなくて、展示も新しい可能性を模索する中で、ムセイオンを活用しているといった表現が事業報告や計画の中に入っているのも良いのではないかと思います。今日のお話を伺っていました。

【木下館長】

最初に館長に向けてのご意見を賜りたいと申し上げたので、お答えしないといけないと思っていますが、私が1人で話しをすると、他の委員の方が話せませんから、後でまとめてお話しします。

【曽根委員】

加藤委員がおっしゃった当事者について、まさに友の会が当事者ですけれど、今、全体で342人の会員がいるんですけど、かつてより減っていますが、少し人数を戻しています。というのは、館内の修復工事をしていた時期があって、その間、閉館、あるいは部分的にしか見ることができない等、色々な事情があって、不便な時期があって、それで少し減ったのです。しかし、最近は戻りつつあると思います。1つは友の会というのは、自分自身が実技を経験したり、それに加えて色々な方に声をかけて来館するような形になっていると思いますけれども、それと色々な所に美術館巡りをしたり、友人関係を作りながら人数を増やしていくということもあると思います。

先ほど、開催実績の中で、「石崎光瑤」展の来館者が非常に飛び抜けて、見込みよりも多いということがあったわけですが、逆に見込みより少なかったという催しもあるし、何故多かったのか、少なかったのか、人数はあまり問題ではないという考え方もあるのですけれども、常に分析をしているかどうかということで、一つ一つの企画展について、どういう来館者の感想があって、何が人気だったのか、あるいは、何があまり人気には繋がらなかったのかという、その原因や傾向等について分析するようなことを、それぞれの企画展の後で、やっておられるかどうかということについて、お伺いしたい。

【木下館長】

個別の自己評価はしております。

これは、先ほど申し上げましたとおり、第三者評価委員会に提出するために個別に自己評価はしますが、十分な分析を館内に共有しているかどうか、そこまではなかなかできていない。例えば、昨年の「無言館と、かつてありし信濃デッサン館」は私自身が企画したのですが、自己評価しますと、見込みより少なかったということは何かと考えると、幾つか理由はあると思いますが、例えばタイトルが長すぎた、これは重要ではないかなと思っています。こちらの意図が端的に伝わるようなタイトルではなかった。そのことが一つの教訓として共有し、次に繋げていけるかとなると、そこまでの問題を共有する場がまだ無いという感じはします。学芸員は、担当した展覧会が終わってしまうと、すぐに次のことに追われてしまうのが現実だと思います。

先ほど、「これからの風景」で、SPACと組んで視覚障がい者のために風景画を体験してもらう、その時にSPACの役者のコメントや曲が流れていますが、あれは正直な話、私はできてから知ったのです。SPACとの協力も後から教えられた。担当学芸員の念頭にムセイオン静岡があったかという点、多分、それは無かったのではないのでしょうか。

【富沢壽勇委員】

しかし、自然な形でそういう試みがでてくるのであれば、今後はもっと連携を試みても面白いのでは。

【木下館長】

個別の学芸員が努力して、色々なことを開拓していく、それを次にどのように繋げる、あるいはどういう反省に立って改善方法を考えていくのか、そこまではなかなか実態としては追いついていないというのが実情ですね。

【鬼頭会長】

よろしいですか?それでは、他にいかがでしょうか?

新メンバーの方、神戸委員、海外からの観光客、こういう方の美術鑑賞はどうでしょうか?

【神戸委員】

昨年度、ランドオペレーターのファムトリップをやられたということですが、先ほど館長がおっしゃったように、国内ですが、日本平に泊まって、1泊旅行の商品が販売されているようですが、ファムトリップの反応、それから実際、ルートに組み込むということが、どれ位把握しているのか、わかっていたら教えてください。

【木下館長】

そういう実態までは把握できていないです。

【神戸委員】

その辺りは、私どもも一緒になって研究していきたいと思います。

それと話がかわってしまいましたが、4本の企画展の多様性というお話しをされていて、狙いと評価はどうでしょうか?

今年度の企画展を見ますと、エジプト展が好調で66,000人、この後も「金曜ロードショーとジブリ」

展があります。開館以来の27万人を達成するという、人数的には意欲的な企画展だと思います。

「金曜ロードショーとジブリ」展、これは期間も非常に長くやってらして、どんなことをやられるのか、これへの広報はどういう形でやられるのか、お話しできる範囲でお教えてください。

【石上学芸課長】

10月11日から「金曜ロードショーとジブリ」展、静岡会場ということで始まるのですが、既に全国の色々な県立クラスの美術館で開催をしております。これまでの色々な会場の開催実績を見ますと、18万人、20万人の観覧者があり、1本の展覧会でこれだけのお客さんをお迎えするというのは、かつて無いことになるであろうということが想定されている展覧会です。多くの方に入っていただくということよりは、大勢のお客様を安全にお迎えして、満足していただける運営ができるかという点で、今、工夫しているところです。今の努力のポイントとしては観覧者数ではなく、運営面でございます。

今年度の4本のラインナップ、多様性という話が出ましたけれど、「古代エジプト」展が6万6千人、「金曜ロードショーとジブリ」展が18万人と非常に大きな数を見込んでおりまして、本当は、1本でも翌年度に動かすことができれば、年間のバランスも良くなったのかなと思っておりますけれど、その辺りは美術館側だけではなく、一緒に展覧会を開催するマスコミ事業部等の事情もありまして、こうなった次第です。

【神戸委員】

大変、県内への波及効果も大きいと思いますので、非常に期待をしております。

【木下館長】

少し、キャパを超えてしまうかもしれませんね。「古代エジプト」展でも、会期の最後の方では、相当混み合ってしまった。

【鬼頭会長】

適正な入館者数の管理については、どうですか？

【石上学芸課長】

普通にいくと、この「ジブリ」展はキャパを超えるのではないかと心配がある規模でございます。通常、展示室の第7室というところでコレクションをご覧いただいているのですが、「ジブリ」展の会期中は、そちらは、お客様の混雑緩和のためのスペースとして利用するというので、少し工夫をしているところでございます。

他館の、既に巡回を終えている会場の視察に行って、担当の方にお話しを聞いたりしたところ、やはり、これまでに無い規模のお客様を迎えているとのことですので、先行する会場の工夫を色々勉強しながら準備をしているところです。

【鬼頭会長】

大勢の方に来ていただきたいけど、一度に集中されても困るということですね。

【日比野委員】

少し、話がそれてしまうかもしれませんが、先ほどアートプロジェクトの話を聞いて、それから、館

長から40年後の美術館の在り方という話を聞いて、もう一つ最近の傾向として日展とか、県の芸術祭、市の芸術祭も参加者が減っていると思います。

美術館は、とりあえず展示をしてお客さんに見に来ていただいて成立っているわけですけど、組織そのもの、現在の学芸職員の採用の分野はこれで良いのか、アートプロジェクトの分野は現代アートの担当の人がやっていると思いますが、ハード面のマイナスもあろうかとは思いますが、その辺、ある程度ビジョンなり、こういうことがあるのかもしれないということを見ていって、そして、学芸員の採用も日本美術専攻、西洋美術専攻ということではなくて、新しいアートの表現なり理解を進めるようなプロジェクトができる人材、そういう風にしていかないと、建物もそうだし、組織もそうだし、お客さんも…少しチグハグだと思います。僕は掛川だから、若干田舎だと思いますが、少し時代遅れで良いという気持ちでいます、だけど東京では新しい美術館、こういう展覧会は入るのかという、簡単な例を言うと、ルノアールとか、モネとか喫茶店はいっぱいあったのですが、今、そういうことはあまり聞きません。こういうことに象徴されるのではないかと思います、時代に合った組織、人員、職員構成を併せて見ていただくことが重要だと思いました。

先ほどのアートプロジェクトが、アーツカウンシルではなくて美術館として何らかの形で、館内で展示が仕事ではなくて、外に出て行って美術館活動をする、ということこれから考える必要があるのではないのでしょうか？

【加藤委員】

ありがとうございます。貴重なご意見をいただいてありがとうございます。

少し、これが参考になるかどうかわからない、逆効果かもしれないのですが、昔、横浜美術館の運営財団に都合8年いたことがあって、同じような課題を抱えていて、もう少し開かれた美術館にならないものかということで、こういう提案をしました。

「市民の方々から企画提案を受けて、それを美術館で実現することはできないのか？」と申し上げたところ、学芸員は「何を馬鹿なことを言っているのだ。」というリアクションで、「市民から出てきたようなアイディアにろくなものがあるわけがない。」と、もう少し表現は穏やかだったと思いますが、「我々専門家がこれだけ一生懸命考えて、何年も準備をして造っているのに、あなたみたいな素人が何を言っているのだ。」という意見でした。それに対して私が押し返したのは、「ろくでもない提案かもしれないけど、その中には興味深い提案もあるに違いない、確かに、即、それをそっくりそのまま実施するには、とてもではないけど美術館ではできないというアイディアであっても、その精神というか、骨子というかポイントというか、それを、専門家であるあなた方が実現できないとなると、あなた方の専門性なんて大したことがない。」という風に言い返して、大論争になって、「変な人が突然やって来た。」と無茶苦茶言われましたが、でも、2、3は実現していただきました。

その1つは、アトリエという部分があったので、そこが本当にアトリエとして機能してもらうために、若手の芸術家に現実にアトリエに来てもらい、そこにしばらく滞在してもらって、作品作りをしてもらって、それを展示するというのをしました。それから、さすがに市民の企画を実現できませんでした。が、美術に関しては必ずしも専門ではない文化に詳しい方々からアイディアを募って、それを補足して実現するという展覧会を開催しました。上手くいったかどうか分かりませんが色々実験をしました。

それやこれや考えていると、最近、八戸市の美術館、もともとあったのですが、小さな美術館で、人が全く来ないような美術館だったのですが、最近新築されて、非常に明るくて良い美術館になりました。この美術館が面白いのは、一番肝心の真ん中の部屋はミーティングルームです。そこで何をやっている

かと言うと、市民を交えて企画会議をやっています。オープンで。市民からでて来る企画をそっくりそのままやるのではなく、専門家との間で色々と議論をして、「これはできる、この部分はできない、あるいは、ここはもう少しブラッシュアップしてこのような形にしましょうよ。」というような会議をやっていて、ここの美術館もエントランスホールをあんなに開けておく必要があるのか、もしこれを本当に取り組もうとしたら大変なことで、第一人手が足りない、ただでさえ今は学芸員の方は手いっぱい、学芸員ではなく雑芸員と言われている時代ですから。手が足りないのは事実ですが、全部、自分たちでやろうとすると大変だけれど、その部分を幾つかの機関と連携してやっていく、あくまで連携ですからコミットはするのですが、そのような方法もあるだろうし、やれそうなことは、まだまだ開発の余地はあるはずです。

私のささやかな経験でも、みんながみんな上手くいっているわけではなく、内容をどうしたら、もう少し上手くいったのだろうかということは、まだ課題として残っていますが、このようなことをお考えいただくとありがたく思います。

【鬼頭会長】

ありがとうございます。

今日、午前中に県が主催している「ふじのくに芸術祭」の企画委員会がありまして、その中で統計が公表されていますけれど、2010年、平成22年ですね、から昨年までの15年分の作品の本数、美術、書道などですが、33%減っています。コロナのせいではありません。もっと、ずっと前から減っています。公募展に参加して自分の作品を展示するという方は減っています。これは人口減少や高齢化は関係あると思います。もう1つは、出品量の問題もあるでしょうし、そこで色々な意見がありまして、新しいジャンルの文化活動を評価して加えていったらどうかという意見でした。旧態依然としたままでは文化面は成り立たなくなってしまうだろうというのが今朝の委員会で感じたことです。

来年度、40周年を迎えるわけで、これから先40年を考えるに良い機会だと思いますので将来の美術館の在り方について議論していただいたら良いと思います。

いかがでしょうか？まだ、ご発言いただいていない方、いかがですか？

【富澤かな委員】

私は、割と漠然とした話をさせていただきますが、色々見せていただきました中で「石崎光瑠」は面白かったし、こんな人なのかとびっくりしました。

自分の中で感じたことは、私は先ほど申しましたとおり、県大に在る間にすごくここに来させていただいたことで、屏風を見せていただくことがあまりに多かったのも、それを経て見たという楽しさがあるのもすごくあって、そういうことが、ずっと積み重なってきたのではないかと思うところがありました。今までのことがあっての、もちろん「石崎光瑠」はここだけの企画ではありませんし、すごく特殊なものではあったのですが、そういうものを経て見ている人がいるのかなと思いました。自分は少なくとも、それを感じました。繋がってくることの意味があって、今年は「エジプト」と「ジブリ」があまりにも大き過ぎて、数字の問題だけではなく、この2つが入ったことで、間に風景画が入ったり、現代美術が入るのですけれども、大きな独自展という感じの記憶が残るようなものになるかと言うと少しわからないと、勝手に外部の人間として思いがあって、回ってくる巨大巡回展とオリジナルなもののバランスがいつも、きっと苦慮されているのだろうと思うのですが、長く見させていただいて、やっとそういうことを感じたと言いたいと思ったことが1つです。

数字で思ったことは「無言館」に何故こんなに来なかったのだろうというのは、文字が長かったから

というのはわからないのですが、大学関係者として思うのは、学生が来なかったのかなというのは、この数字を見て思うところがありました。学生がいかにも来るべきだし、来たら良いし、呼べそうなものだったり、自分は今、県大の教員でもないのですが、大学生を美術館とか、色々なものに繋ぐ役割を教員が果たしていないのかなと、自分のことをずっと思い続けてきたところがあります。

どうやったら、大学はもっと美術館に、本当に県大は夢のような場所で、横にあるけれど、来る子は来るんです、だから毎回どれも全部行っている人もいるし、4年間の内に1回も来てない人もそれなりにいて、どうやったら大学生がこちらに繋がるのか良くわからないのですが、急に大学の人間らしく地味な考え方をするのですが、いきなり大学生が繋がるかわからないのですが、大学教員がこちらに繋がることとして、着々と進められている調査研究のところに、県大の教員あたりに少し教えていただいたら、案外参加させていただけるなら、したい人はいるのかなと思うところがありまして、案内があったら来たいなと後になって思ったことがあります。今は東京から来られない、それでも来たいというのはあると思います。

こちらの小さい図書館みたいな空間を、多分、大学生はそこを使えとあまりリアルに思っていないのですが、自分の図書館に無い物があるわけで、私は、こちらを使わせてもらったことがあって、県大は博物館学が無いので学芸員資格は取れないのですが、美術史関連の専門家もほとんどいないのですが、ここでこういうやり方をすると美術史に関して1本良いレポートを書けるといったこともあると思います。そういう形になったら良いのではないかなというところがあります。

これは質問なのですが、今でもうちは、科研番号は取れないような状態です。それは美術館の問題ではなく、もっと大きな話ですが、色々本当に着々とやってらっしゃることが、そういうものに繋がらないというのは、本当に、どうしてそういうような仕組みなんだろうと思わざるを得ないと思います。大学関係者と美術館でされていることは、本当はもっと、幾らでも本当は繋がるのに…

今年の収支予算はおいくらでしょうか？去年は110万円分お買い上げというのがあったのですが…

【滝副館長】

ほぼ同じ金額です。

【富澤かな委員】

来年度は大きな節目ですが、県がたくさんバンとお金をくれるとか…ないですね

【木下館長】

もちろん、働きかけてはきましたが。

【富澤かな委員】

前にも申しましたが、こちらは寄贈というのは着々と、個人で素晴らしい方はいらっしゃいましたけれど、もう少しお金かけたら良いのにと思いました。

【鬼頭会長】

文化芸術というのは、非常に創造性が高く経済に影響があると知事に訴えかけていますが、なかなか理解していただくのは難しいですね。

【木下館長】

今、大学生が来ないというのは、おっしゃるとおりで、大学生、高校生、中学生は、美術館に一番足

が遠のいているような気がします。ここは実技室を持っていることによって、小学生以下に対しては、さまざまなプログラムを提供しているけど、子どもの数が減っているということは先ほど話が出ました。それから従来の美術館の展覧会を支えてきた人たち、中高年層がさらに高年齢化しているわけです。したがって、今の若者たちに美術館に足を運んでもらうことは、すごく大きな課題だと思っています。

ただ、今の若者にとっての関心事で、美術は優先順位としてはどうなのでしょう。音楽やファッション等と比べると、やっぱり下がってしまうのではないかな。

それは、その従来型の美術というものを中心に、絵画、彫刻というものを中心にしてしまうこと故に、若者をつかめないということもあるかなという気がしています。

【鬼頭会長】

鈴木委員、いかがですか？

【鈴木委員】

結論だけ先に言ってしまうと、おっしゃるとおりで、教育普及は多分、館の将来への最大の投資だと思うので、工夫していただけると良いと思います。

雑感も含めて、色々、委員の方がおっしゃったとおりで興味深いものがたくさんあるなと思いました。

他県の方もいらっしゃったりということで、発信の仕方も良いのかなということもわかりました。

今度、次の展覧会も控えているということも含めまして、高等学校、中学校や小学校もそうですが、現状を言うと、日本語だけでは対応できない状態です。展覧会もぜひそういう風になると良いかなと思います。

去年も連携という言葉はなかなか難しいという話でありましたが、高等学校、学校も実はハコモノとしては限界を迎えている、維持管理すらまともにできるかわからない予算でございます。人口のこともそうですし、それらを取り巻く環境や地域の状況もドンドン変化してきている。そういう中でハコモノにこだわっていると取り残されたり、今、地域協議会と言って、高等学校では各地域ごとに合併、統廃合の協議をしていますが、それに巻き込まれてしまう、そういう流れの中で、美術館がハコモノとして機能としては、作品の修復や文化継承という義務があるわけで、それだけは最低限でもと思いつつ、これから先どうするのかというと、若者が今あるもの、館で鑑賞するということが必ずしもリアルではないということ、別の仮想の世界、クラウドの世界、SNSの世界、そちらの方にも同じか、あるいはそれ以上にリアルさを感じている、そうしたら価値を変えるのかもしれないなと個人的には感じています。

すごい無理な話ですが、高校で美術の教員が、公立学校では30人切りました。一番年下でも30代半ば位、極端に言うと、私より年上、いわゆる再任用の方々はかなりいらっしゃいます。そういう状態であるという背景を思い浮かべながら聞いていただきたいのですが、オンラインとは言いませんが、オンデマンドで短時間の展覧会のレクチャーや作品の解説の動画、これを有名な声優が担って配信したり、提供したりしていただけると授業の導入で使える、それからできれば二か国、三か国語あれば非常にありがたい。これが常に、どこからでも主張できるような状況が良いのかどうかわかりません。少なくとも学校教育の場では非常にありがたい、何を言いたいかなと言えば、美術の先生がほとんどいませんで、小中では美術を知らない先生、国語の先生、体育の先生が美術や図工を教えるわけで、館の将来にとっては由々しき事態となるでしょう。高校で教える僕らとしてもそうなのですが、基礎ができていない子たちがいきなり高校で美術を、ある程度美大、芸大を出た教員が教えようとする、ものすごく違和感があるということになります、という状況があるのでカバーする、先ほど言った連携しようすると主語になるとどうやって一体化していくか、ということでございます。

それから、どちらでもいいようなアイディアで、半分ふざけていますが、静岡県立美術館も企業サポーターを募集して、館の名前をチュールスタジアムみたいに名前を時々変えたりしながら、少し、様子を変えるのも手かなと思っていました。半分は冗談ですけど…今の地位にいるわけではないのと、外にアピールすることは、「視覚的に色々なことを変えてくるね。」と思わせる効果があると思います。

もう一つ、一方で、本当に色々な事業をされているので学芸員の皆さんは大変だと実は思っていますが、学校でも先生方の働き方改革と随分言われていて、僕の立場からすると、怒られる立場になってしまっているのですが、働かせ過ぎて、当たり前のことですが、美術館の色々な業務も、単年度で終わらせるもの、数年で検証して終わるもの、継続してある程度じっくりやるもの等仕分けをしながらやっていくのが良いのかなと思ったりもしました。その中で、やめていく勇氣も必要なのだろうと個人的には思います。そのタイミングで何か違うものに変ったなというものを打ち出していけば問題ないかなと思ったりもしました。

全然美術とは関係ない方の力を借りるという意味では、例えばですけど藤枝出身の池谷祐二さんという東大の方がいらっしゃるんですけど、脳科学科か何か、大変詳しい方ですけども、アートの生活への好影響、人として豊かに暮らすための何か効果的なものというようなことを本を書いた時に、帯に書いていただくことも良いのかなと思いましたけど、できるかどうかわかりませんが…

ただ、一方で僕が期待を持っているのは、いわゆる美術部みたいもの、高校生ですと、県内で色々な学校が部活として持っていますけれど、10年前が県内全域で1,300人前後部員がいましたが、今、生徒がものすごく減っているはずですけど、まだ、1,000を切っていません。そういう意味では、興味のある子はたくさんいます。ずっと絵を描いている、それに関しては特異な才能を見せる子がたくさんいます。そういう子を何とか、官民含めて、こういう世界を見せてあげたいという思いもありながらやっているところですが、そういう意味では、先ほど言った色々な国籍の方々が全員見ることができる館であって欲しい、そういう子たちも切り離さない館であって欲しいと思います。

先ほどの話に戻りますけれど、中高生は親とは一緒に行かない、友達とどこかに行くという世代になります。そこにアプローチするにはやはり、その前の幼・小あたりのアプローチと、仮想SNSの世界で、X等色々ありますが、それは既に子どもたちは古いと言っておりますので追いかけるのは大変ですけど、そういうところにもアプローチする必要があります。

【木下館長】

2つだけよろしいですか？

1つは、今の高校生にとってのリアリティはバーチャルな世界だろうというのは、おっしゃるとおりだと思います。美術館は徹底的にリアルな世界で、展示室の壁に絵を掛けて、それを見に来てくださいうことをやってきたわけです。ただ一方で、来年に向けて今、若冲の絵の絵の具の厚みを徹底的に可視化するという企画を練っています。それが一体、何になるんだという問いもあります。若冲を見る時に、絵の具の山の高さを見ていくような精緻な画像が生まれてくるわけです。それは肉眼では見えない世界を新たに提示できるだろうと思いますので、こちらから、バーチャルな世界により親しんでいる、より居ごちの良さを感じている人たちに働きかけていくことができるかもしれません。

それから、美術部員が減っていないということですが、いわゆる障がい者アートの問題は美術館にとっても重要なもので、新たに法律もできて、県も芸術祭と一緒にやっということですので、美術館がこれから取り組むべき課題です。これまでは、障がい者の文化芸術活動を説明する際によく使われてきた「専門教育を受けているか否か」というあの線引き自体を疑ってかかるべきでしょう。そもそも専門的教育とは何であったのかを含めて。これまでの美術館は、いわば専門教育を受けてきた人の作品を

見せればよかったが、変えていかざるを得ない。そんなことを思いました。

【鬼頭会長】

上原委員、静岡新聞社では文化欄に毎週、県内の28、29の美術館、博物館の展示会を紹介していますが、マスコミの取組みについて、そのお立場から何かありますでしょうか？

【上原委員】

弊社でも、こちらの美術館には大変お世話になっていまして、館長にもレポートを書いていただいております。私自身は最初申し上げたとおり政治等社会系の仕事、取材をずっとしていまして、文化部の出身でもないですし、あるいは、学生時代も全く縁がなかったわけですが、この委員になるとは全く思っていなかった中で、最近、こちらの美術館に足を運ぶ機会が増えて、例えば、皆さんからの評価が高い「光瑤」展も足を運ばせていただいて、作品の魅力や人となりはすごいなということで、かなり長く、普通ザッと見る人が多いのですが、非常に時間をかけて鑑賞したなという思いがあります。

その中で、皆さん、若者や小中学生という視点がありますけど、我々世代は中高年ですけども会社でもなかなか厳しい立場で、テクノロジーも発達して、AIやスマホもそうですけれど、技術と触れたいという気持ちが出てきます。そういった層にアプローチするというのも需要があるのかなと、自分自身の体験を通じて思っています。

将棋の青野照市先生、焼津出身の方ともお付き合いがあるのですが、青野先生は棋士ですから理性的ですが、美術を見たり、音楽に触れ合うことで将棋が強くなるという考え方をされていて、よく、「絵を見に行ったほうが良いよ。」という話をされます。感性豊かにということで、若い人に「美術を見た方が良いよ。」と言っても目の前のことで精一杯で響かないところがあると思いますが、ある程度中高年になってくると、そういうような気持ちになってくるとい部分もあるので、そちらの方へのアプローチも美術館にとって、新しい層の開拓になるのかなと思います。

もう1つ、こちらの美術館は、「静岡ゆかりの」というところで、作品の収集も含めて力を入れていらっしゃると思います。展示会もバランスを見ながら、多様性ということでやってらっしゃると思います。これは静岡県立美術館という存在が大きいと思いますので、引き続き静岡ゆかりの作家に光を当てたり、あるいは、世に出るきっかけになる、そういうことに繋がる美術館であって欲しいなと思っております。

【堀切副会長】

若者にとってのリアリティとは何なのかということは、大学で若者を見ていると感じることです。上原委員の前では申し上げにくいですが、この間、大学生に新聞紙を渡しました。新聞紙を初めて触ったという学生が1/3位、あるいは、もっと多い、そういう時代です。ネットでは静岡新聞を見たりしているのですが、新聞紙という物を手に取って見たのは初めてらしいです。そういう時代です。ですから美術というものは、相当我々が考えている美術の認識から地滑りのように若者にとっての美術は動いているのではないかと感じています。

例えば、常葉大学には造形学部がありますが、今、アートということでは学生は集まりません。アートでは学生を募集できないのでデザイン、デザインでも集まらないから地域課題研究、そういうプロジェクト的なものにドンドンドンドン、カリキュラムが移行しています。

美術館や博物館という名前が古い、ミュージアムならまだわかると言うのです。そういう若い人たちを相手に考えていかなければならないので、なかなか大変です。これは、大学の経営のことですけども…

最近、そういうことが立て続けにあったものですから、自分の認識を相当刷新しないといけないと思った次第です。

障がい者の話がありましたけれど、障がい者に関して言えば、スポーツの方がはるかに進んでおり、今、障がい者スポーツとは言わないです、パラスポーツ、アダプテッド・スポーツと言います。障がい者だけのスポーツの大会もありますが、そうではなくて、障がい者と健常者の垣根を取り払って、一緒にできるようなスポーツを考えて競技するという、そういう時代にスポーツの世界は動いています。ですから、障がい者アートというのは古いのかもしれなくて、障がい者が有る、無し、教育を受けている、受けていないという垣根を取り払った新しいアートの形を模索していく必要があるのかなと思います。そもそも美術に関する考え方の違いが時代によってあるのだらうと思います。

今日お伺いして色々と思ったのは、私も勉強になりましたが、ひとつには美術館に対する当事者を増やしていくということ。これはリアリティの問題にも関わってくるのですが、リアルに関わる人を増やすということです。そのためにアートカウンスル、ムセイオンと連携してアウトリーチを分担していくというお話ができましたけれど、私も経験がありますが、アウトリーチをすると現場が疲弊します、大変ですから。外に展開していくためには人材が必要です。人材を確保するか、人材を育成するかということを考えないと外で当事者を増やしていくという戦略は無理ではないか、しかし、学芸員という縛りを外せば、そういうフットワークが軽い人はどこの世界にもいるので、学芸員でなくとも、外への展開ができる人は公務員の中にもいますので、そういう人を引っ張ってきて、しかるべき職務を与えて活躍していただくというのも、一つの手かな…と考えます。

密に関わってくれる当事者を増やすという一方で、逆に薄く、浅くという方法もあります。薄く、浅くという人にアプローチするには現段階ではSNSの力は非常に有効で、その部分も同時にやっていく、そうすると外で密に関わっていただくお客さんの層と、美術館に来ていただく従来のお客さんの層と、美術館には来ないけれど薄く浅く関わってくれるお客さんの層と3つ想定して、その3つに対してそれぞれ戦略を立てていくという考え方ができます。実はこの事業報告を見させていただいて、それなりに、そういうことを色々やっているなと思っています。SNSの展開、Vチューバーの展開という部分に力を入れてやってらっしゃいますし、アウトリーチに関しても、私がこんな偉そうなことを言うまでもなく、新しいことをやってらっしゃるので、引き続き頑張りたい、ただ、アウトリーチに関しては人材が欲しいですね、今の戦力でこれをやれというのは厳しいと思います。若者が振り向いてくれるような美術館になれば良いなと思います。

【鬼頭会長】

まだご意見たくさんあるかと思いますけれど、予定の時間も迫っていますので、もし、これだけはこの人がいらっしゃいましたら、お一人だけ…、ではお二人…

【加藤委員】

「中村宏」展が開催される、これは個人的に関心を持っていまして、私が大学に入ったのは、今から何年前とは言いたくないけれど、入って一番最初に買った画集が「中村宏」展の画集、素晴らしいものでした。それで、その頃から変な人、変な人と思ったからこそ、私のような必ずしも美術に詳しくない人間が買ったわけで、この間、テレビを見ていたら、全然関係のない話ですが、今、はやりのすごく受けている歌手の歌詞を歌っていましたが、その歌詞に、「僕たちに今必要なことを大人にとっては無駄なこと」と歌っていた、つまり、これは「アナクロニズムのその先」で、そのとおりだけれども、「今、僕たちに必要なことは、60年経ってどう変わったか」というようなキャッチコピーにしてもらっ

たら、もう少し若者の、大人にとっては無駄だけれども、僕たちにとってはこの時代に必要だった、60年前に必要なことと、今必要なことは全く違うはずですけど、とは言え、共通した何かもあるはずなので、要はことごとく正しいことが書いてあるけれど、何か魅力に乏しいと言うか、まじめすぎる言うか、もう少し楽しいキャッチコピーにしてもらいたいのにと思いました。

【富沢壽勇委員】

1つ伺っておきたかったことは、今日の実績報告の広報、情報発信のところで、各展覧会の客層を考慮したポスターとチラシの配布、駅貼り、車内吊りというのができたのですが、各企画展ごとにある程度、入館者はどういう所から来るかということのを予想を立てながら企画をされ、広報活動をしているのか少し確認をしたいです。先ほど富澤かな委員から無言館については、中高生や大学生はあまり来なかったかもしれないと推測されていました。全体としては10,000人とそれ程悪くはないと思いますが、若い人たちにぜひ見てもらいたいという企画もあると思うので、例えば、中高大学生だったら、我々のような学校関係の委員を通じて広報することは可能かなと思いますが、毎回の企画について、どのように入館者を予想しているかお聞かせください。

【木下館長】

展覧会ごとに広報先を変えているかどうかということですよ？

【稲葉企画総務課長】

基本的に配る所というのはベースがありまして、そこはそこで送ります。展覧会によって、ジャンルを絞ってやることもございますので、ただそこが絶対的な数が多い所に行ってるかっていうところは、少し自信がないですが、絞り込んでやってることもございます。日本画の展覧会であれば、日本画に関連したジャンルのところにピンポイントに当てて送ることもございますし、それが必ずしもそこに繋がっているかどうかということは、そこまでの分析はできていません。

【富沢壽勇委員】

広報とかチラシの配布先とか、場所、それはその都度変わっているわけですね、企画ごとに。

【稲葉企画総務課長】

まずベースがあって、その上に今のお話がかくつついてくるようなイメージで良いと思います。

【鬼頭会長】

丁度、予定の時刻を迎えようとしています。貴重なご意見をありがとうございます。議事進行、上手くいったかどうかわかりませんが、魅力ある美術館となるために、40年先を目指してご尽力いただきたいと思います。また、これを機にご意見等ございましたら、事務局の方へお届けいただければと思います。今日は活発なご意見を賜りましてありがとうございます。

【稲葉企画総務課長】

長時間にわたりご審議いただきありがとうございます。最後に木下館長から一言お願いします。

【木下館長】

今日は本当にありがとうございました。

冒頭申し上げたとおり、これは館長に意見を言うということで、できるだけお答えしようと思いました
が、お答えしきれない大きな問題が多々ありました。また、時間的な制約もありました。

1つ、冒頭で日比野委員が美術館の力というのを、もう1回考えてみようとおっしゃった。40年前に
当館がスタートした時、三重県立美術館と岐阜県美術館を一種のライバルに想定されていたということ
ですね。その時は、ある意味ゼロでスタートした。それから40年が過ぎた今、この美術館の力はどうや
って測るのだろう、指標は何だろう、もちろん歴代入館者というのは一つの指標かもしれませんが、
やはり、築いてきたコレクションが非常に重要だなと思いながら伺っておりました。ですから、仮に三
重と岐阜の美術館がどういうコレクションを築いてきたのかと比べてみるとします。それぞれに特徴の
あるコレクションを築いてきたとは思いますが、当館の所蔵品が2,900点あまりというのは、意外と少
ないなという感じを持ちます。万単位の実美術館も多いです。それだけ、絞って集めてきたという言い方
もできるでしょう。会議の冒頭でこれからの40年を考えてみたいということを申し上げましたけれど、
これまでに集めてきたコレクションをどう活かしながら、その提示の仕方を考えていくということが重
要だろうと思います。

来年は年間を通じて40周年記念展をやっていきますが、その第一弾として、「静岡県立美術館を開く
7つの扉」という展覧会を企画しています。私と5人の学芸員がチームを組んで、1人1部屋を担当す
るという感じで、先程の若冲の立体的な画像というのは、その中で提示してまいります。ですから、今
日、いただいたご意見をすべてをそこに活かすことはなかなか難しいけれども、できる限り、これから
の美術館をどう変えていくのか、美術館がどう変わっていけるのかを示すような展覧会にもしてい
きたいと思っております。それはちょうど1年後ですので、次回もまたご意見を賜りたいと思います。今
日は長時間にわたって本当にありがとうございました。

【稲葉企画総務課長】

改めまして本日はありがとうございました。いただきましたご意見は、これからの美術館運営に役立
たせていきたいと思っております。本日はありがとうございました